

# 学習者が実感する「書くことを続ける」意義

—国語科授業における学習記録をもとに—

金子 萌

## 1. はじめに

前任校での平成28年度「国語総合」の授業において、毎時間授業の終末に「学習記録を書く」活動を導入した。定時制高校である前任校には、小中学校での学びの経験が乏しい者が多く在籍しており、学ぶことの楽しさや意義を知らずに育ってきている者も少なくないと感じていた。そこで学習者には、1年間の国語学習を通して、学ぶことの価値に気づかせ、学び続けることへの意欲を高めたいと考えた。また、デジタルツールの普及により、いつでもどこでも自分の思いを発信できる彼らであるがゆえに、他者に向けた自己の表現について深く考えることが不足しているとも考えていた。自らの手で「書くこと」の必要感が薄れていることや、書くことで思考が深まることへの実感を持っていないことは、彼らの課題であると思われた。そこで彼らに、「書くこと」を通して物事を深く考える素地を養うため、「書く」という表現活動を1年間継続することを授業の柱とし、授業の終末時に「学習記録を書く活動」を意図的に組み込むこととした。本稿では、1年間の実践内容を振り返るとともに、学びを終えた彼らの記述内容から、学習者が「書くことを続ける」ことの意義をどのように捉えたかを考察し、実践の成果を明らかにする。

## 2. 指導にあたって

### (1) 授業開き

オリエンテーション時に、この授業では毎時間必ず学習記録を書く活動があることと、この活動を行う意義について説明した。また、書いた学習記録は成績評価の材料の一つとして扱うことも伝えた。ただし、誤字脱字等での減点は一切しないこと、「書いた内容」「考えた内容」を授業者は評価することを強調して伝えた。また、毎回「学習記録課題」を提示し、それについて書くことがこの授業における「学習記録」であると伝えた。

### (2) 書き続けるための手立て

毎回の授業では、最後に学習記録を書く時間があることを含め、「本時の流れ」を学習者と共有することを欠かさず行った。学習者は次に何の活動があるのかをくみ取りながら、見

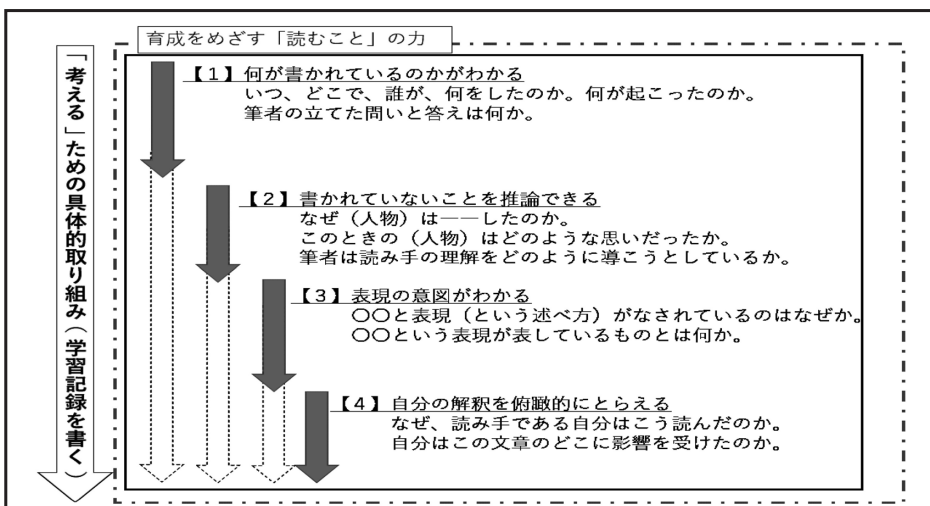
通しを持って学習に取り組み、毎時間終末時に書く活動があることにも理解を示していた。また、専用ノートを一人一冊作成し、学習記録のみを綴っていくこととした。授業者の設定する「学習記録課題」は、授業の終末時にスクリーン上で示し、授業プリントの裏面に書き出しのてびきを載せた。そのため、書ける生徒はスクリーンのみを見て書き、苦手な生徒はプリントの裏側を見ながら書くことができていた。

学習記録ノートは毎時間回収し、授業者は次時までにはすべてに目を通し、コメントを入れておいた。次時の学習につながる記述や独自の視点で意見を書いているものについては、授業時のスライドに打ち込み、全体で共有できるようにした。授業者から見て、全体で共有すべきだと思った記述内容については、ノートに付箋を貼っておき、評価されたことが学習者自身にもわかるようにしていた。

本来、「学習記録」とは、その1時間で自分が身についたと思うことや心に残ったことを自由に記録していくものであるため、「課題文」があることで学習者の考えを狭めてしまうことも考えられた。しかし、1時間の授業において、この学習記録を書く時間を個人の深い学びとして位置づけたいというねらいがあったため、毎回「考えるテーマ」として「学習記録課題」を設定した。

### (3) 課題設定

「学習記録課題」の設定においては、「育成をめざす力」を以下のように措定し、さまざまなパターンの課題文が提示できるようにした。



【図】学習記録を書く活動をととして育成をめざす「読むこと」の力(筆者作成)

学校から社会に接続する高校段階において、学習者には自己の内面と向き合うことができるようになってほしいと考えている。とくに目の前の学習者たちを見てみると、うまくできたことを自信につなげることが苦手な者が多いことがわかる。また、うまくいかなかったことに対する怒りや悲しみについては、その原因や自分の感情について落ち着いて捉えることができず、自己の感情を思いのまま他者にぶつけてしまうこともある。そのために、「読むこと」における長期的なゴールとして、自分の読み（考え）をメタ的にとらえることができるようになってほしいと考えていた。「なぜ自分はこう考えたのか」を自分自身で問い直し、答えるために思考していける読者を育てたいというのが授業者としての願いであった。そのためには、図に示す【1】～【4】について自分の言葉で伝えられるようになることが必要であると考えた。このような目標について段階的かつ意図的に指導していくことを念頭において、学習記録の「課題文」を設定することとした。

夏休み前までは文章を書き慣れさせること、書くために読むというスタイルに慣れていくことを大きな目標とした。その中で、「読むこと」については、夏休み前の段階では、何が書かれていたかを正確に読むことに加えて、なぜそう書かれているかといった表現の意図を自分で解釈することに挑戦させたいと考えた。ただし、これらは大まかな想定であり、学習者全員が同じスピードで達成できるものではない。生徒によってそれぞれの矢印の長さが異なり、夏休み前の段階で、「【1】何が書かれているかがわかる」ことが主たる目標となる者もいた。そのため、学習記録の「課題文」においては、【1】～【4】の要素を繰り返し取り入れ、さまざまな問いに答えることで、考えて読む力を養いたいと考えた。

具体的には、「読むこと」の指導として、6月までは、現代詩、漢詩、和歌、古文などさまざまな作品を読み味わい、自分の考えを書くことに慣れさせることを大切にした。【1】【2】の力をつけることに焦点化し、書くときの視点を「いいなと思う」「共感できる」といった自分の思いから発信させるものとし、まずは自由に何でも書けるようにした。

6月以降からは、小説や評論文の学習に取り組み、単元の終末時には【4】の段階を意識できるよう、課題の設定を行った。次頁の表は、学習者に示した課題の一覧である。

### 3. 指導の実際—『羅生門』を例に—

前節で示したように、毎回学習者には学習記録を書く課題を提示し、読むこと、書くことの力の育成を目指してきた。その中でも、彼らとの1年間の学習計画を立案するにあたり、大きなゴールとして、『羅生門』を他者とともに読み解くことができる」ことを念頭に置いていた。前任校は、学習者のほとんどが「学び直し」を目的として入学してきていた。そのため、まずは中学校卒業程度の能力を身につけさせることを目指さなければならない。また、

【表 学習記録課題一覧】

	学習記録課題	主な教材
1	教科書の目次を読んで	
2	高校の図書館で発見したもの	
3	春の詩を読んで考えたこと	「はる」(谷川俊太郎)
4	「漢文の読み方のきまり」を説明する	「春眠暁を覚えず」(一海知義)
5	「春暁」の語り手はどんな人か	「春暁」(孟浩然)
6	清少納言に共感できるものベスト3	「春はあけぼの」(清少納言)
7	清少納言の文章の工夫とは	「なんてステキな光景なの! ——春はあけぼの」(山口仲美)
8	百人一首を音読して	
9	好きな和歌を紹介しよう	百人一首(『国語便覧』)
10	和歌に込められた、昔の人の恋愛とは	「うた恋い。1～3」(杉田圭)
11	和歌を「書」で表現して	
12	「にくきもの」に賛同できるものは	
13	清少納言はどんな人が苦手なのか	「にくきもの」(清少納言)
14	清少納言の文章の工夫とは	
15	前期中間テストまでの取組について	
16	メモをとるときに大切なことは	
17	メモをとる練習をしてみよう	
18	物語の人物を紹介する	
19	なぜこのメニューが「晩餐」なのか	「子供たちの晩餐」(江國香織)
20	心に残る表現を選んで説明する	
21	次の文章から「運転手」はどんな人だと想像できるか	
22	この物語における「回数券」の意味とは	
23	少年の、「わかっている、そんなの、言われなくなつて。」は、どんな気持ちを表しているか	「バスに乗って」(重松清)
24	物語のはじめと比較して「運転手」の印象はどのように変わったか	
25	最後の段落はこの物語にどんな効果を与えているか	
26	小説の山場とは	絵本「スイミー」(レオ＝レオニ)
27	ねずみを最初から婿にとろうとしなかったのはなぜか	「ねずみの婿取り」
28	ねずみの婿取りの教訓・メッセージとは	
29	赤とんぼと鯉雲、どちらがよい俳句?	『教科書で出会った名句・名歌三〇〇』より抜粋(石原千秋)
30	最優秀作品を選ぼう	お～いお茶新俳句 HP より抜粋
31	この詩の題名を考える	「忘れもの」(高田敏子)
32	前期期末テストまでの取組について	
33	「高名の木登り」の失敗から学ぶことは	
34	「高名の木登り」のもう一つのメッセージとは	「高名の木登り」(『徒然草』)
35	兼好法師が伝えようとしたこととは	「公世の二位のせうとに」(『徒然草』)
36	お話を自分の言葉で語り直す	
37	この物語の「法師」とはどんな人物か	「奥山に猫またといふもの」(『徒然草』)
38	『徒然草』における兼好法師の教えとは	「能をつかんとする人」(『徒然草』)
39	「漢字にも性格がある」とは	
40	具体例を用いて、漢字がどのような文字であるか説明する	「漢字の性格」(金田一春彦)

	学習記録課題	主な教材
41	漢字の印象とは	「漢字の性格」(金田一春彦)
42	漢字の持つ力とは	
43	最も納得できる具体例は?	
44	筆者が述べる「日本人」「日本語」について、どう考えるか	「季節の言葉と出会う」(黛まどか)
45	「主張」から想定可能な「根拠」を述べる	
46	「比較する」ことを使って説明文を書く	
47	なぜ「桜＝日本人の感性」なのか	
48	言葉と私たちの生活の関わりについて考えたこと	
49	俳句の中の「言葉」はどんなイメージを持っているか	百人一首
50	和歌の鑑賞文を書く	
51	和歌の中に見える景色とは	
52	語り手が見ている風景とは	「山行」(杜牧)
53	漢詩のきまりを説明する	「矛盾」
54	「矛」と「盾」で「つじつまが合わないこと」になるのはなぜか	
55	「蛇」＋「足」＝? この答えを予想する	「蛇足」
56	「蛇足」のお話からわかる教えとは何か	「推敲」
57	「推す」＋「敲く」＝「文章をよく考えること」になったわけは	
58	「守株」は何を意味しているのか	「守株」
59	「故事成語」が残り続けているのはなぜか	
60	後期中間テストまでの取組について	
61	筆者の問い:「もし宝くじで三億円当たったらどうするか」にどう答えるか	「何のために『働く』のか」(姜尚中)
62	「一人前になる」とは	
63	筆者の問い:「何のために『働く』のか」にどう答えるか	
64	書で表現した新年の抱負、まずは何をする?	「羅生門」(芥川龍之介)
65	「下人」とはどのような人物か	
66	「老婆」とはどのような人物か	
67	下人の考えに対する意見文を書く	
68	「老婆」の言い分に納得できるか	
69	『羅生門』における「悪」とは	「芥川」(『伊勢物語』)
70	「下人の行方は誰も知らない」が持つ効果とは	
71	物語の男と女はどんな人物か	
72	女が鬼に食われた要因として考えられることは	「筒井筒」(『伊勢物語』)
73	男の和歌にこめられた思いを語る	
74	この物語の男と女は両思いだったのか?	『論語』(孔子)
75	贈り合った和歌に込められた思いを語る	
76	「風吹けば～」の和歌に、女が込めた思いとは	
77	「女」と「高安の女」に何か言ってあげるとしたら	『論語』(孔子)
78	よい学び方とは	
79	「名言」だと思えるものは	
80	国語総合の1年間を終えて	

全員履修科目として学ぶ国語科授業は、1年次「国語総合」と2年次「現代文A」のみであった。国語の授業として学ぶ時間も多くはなく、出合わせられる教材の数も限られている。しかし、社会に出ていく前に、高校の国語教室という場だからこそ読み味わうことのできる教材に出合わせ、「読むこと」の深まりを実感させたいと考えていた。使用教科書の採録教材のうち、高校1年生の定番教材は『羅生門』である。作品として価値があることは言うまでもないが、聞き慣れない語句の多さや論理展開の把握のしにくさから、敬遠する者も少なくなく、ひとり読みですべてを完結させるには困難が生じる作品でもある。ゆえに、授業という集団の中で読み解いていくことに学習としての価値があるとも言える。そのため、高校1年生の定番教材・『羅生門』をこの集団で読めるようになることが、それまでの国語学習の成果と位置づけることができるのではないかと考えた。『羅生門』を他者とともに読み解くことができることを、目の前にいる学習者の1年後の具体的な姿として想定し、教材配列や指導事項の工夫に取り組んだ。

その成果として、1月に行った『羅生門』の授業では、学習者は読むことに主体的に取り組み、実によく深く考え、「学び直し」を超えた学習ができていた。以下は、単元計画と実際に行った学習内容である。

時	学習のねらい	学習内容（発問等）
1	物語の設定を読む	「物語の始まりからわかることは何か」「物語の時代、季節、場所、状況はどのようなか」「下人が羅生門の下にいる理由は何か」
2	人物の設定を読む	「下人の迷いとは何か」「老婆の登場場面はどのように語られているか」
3	人物の心情の変化を読む	「下人の心情の変化をグラフにする」
4	語り手に着目して読む	「下人と老婆の行動を分類する」「老婆の言い分を語り直す」
5	自己の解釈を他者と伝え合いながら読む	「3人の人物は「悪」だと言えるか」（話し合い）
6	物語における表現の意図を読む	「物語の最終場面に欠かせない表現は何か」

1年間の集大成とも言うべき本単元では、単なる物語の理解にとどまらず、テキストに主体的に関わること、すなわち自分が受け取った読みを言語化することを目指した。さらに、それを他者と共有することで、「教室での読み」のおもしろさに気づかせたいと考えていた。そのため、第5時で「登場人物の描写を深く読み込み、自己の解釈を持ち他者と共有し深めること」を核とし、次頁に示すワークシートを用いて学習を進めた。「『下人』『老婆』『老婆に髪を抜かれた女』の三者の行動は「悪」だと言えるか」という問いを設定し、グループで話し合いながら読みを図式化する活動を行った。自己の解釈を他者に伝えることに慣れない者がほとんどであったが、どの学習者も、グループでの話し合い活動では他者の意見に耳を傾け、解釈を深めようとする姿が見られた。



この『羅生門』を読んで、悪というのは自分が生きる為に人を犠牲にすることだと思います。

今回、「下人」「老婆」「女」、全ての人が悪という風に考えました。下人は老婆に何もしないと行ったのに最終的に老婆を犠牲にし、追いはぎをした。老婆も女の髪を犠牲にして盗んだ、女も蛇を魚として売り、買った人の命を犠牲にして飢え死にを防いでいました。なので私は他人を犠牲にすることが悪だと考えました。

私は、まず下人と老婆どちらが悪いか考えたとき、どっちもどっちじゃないか…というように思っていたのですが、今回の授業でクラスの人意見を聞いたとき、下人は老婆に安心させるような言葉を言っておいて、老婆の身ぐるみをはいでいったから下人の方が悪い。と聞き、確かになと思いました。

私が一番悪として困ったのが「女」でした。みんなの意見を聞く限りだと、「こいつが唯一人を殺した」から一番悪いと言っていた人がほとんどだったけど、そもそも女は「人を殺したのか」というところで迷っています。文章中では、「疫病にかかって死なななら——」というような表現しかなく、これが、女が疫病で死んだのか、(蛇の)肉を食べた役人が疫病にかかって死んだのか、仮に女が疫病にかかって死んでしまっただけなら、だましたとはいえ、大事には至っていないので、そこまで悪くない(下人・老婆よりは下)かなあと思うけど、肉を食べた役人が死んでいたとするなら、一番悪いと思います。

私の悪に対する基準は、誰にどれだけの迷惑をかけるかというのを一番重要視しています。

羅生門の中で「悪」なのは人間そのものだと考えました。今日出てきた人物は3人とも、「自分が生きるために悪事を働いていた」ということで、自分さえ生きられればいいという考えの持ち主であったと考えられます。さらに、物語の最初には、「羅生門の修理などは、もとより誰も捨てて顧みる者がなかった。」とあり、自分だけ生きればそれでいいという人は一部だけではなく、たくさんいるということも言えるのではないかと考えました。

#### 4. 1年間の学びを終えて

「国語総合」最後の授業において、この1年間で自分が学び得たものは何だったのかと問いかけた。その際、これまでに学習した作品名を挙げながら、一人ひとりに学習記録ノートを見返す時間をとり、学びの足跡を振り返らせた。

在籍生徒数21名中、欠席者を除く20名が最後のノートを提出した。そのうち、学習記録



を書く活動について触れた者は13名であった。以下は、学習者の記述内容である。

**(1) 学習内容の理解に役立つことが実感できる**

A：この一年間国語の授業を受けて、私は変わったなと思います。他の授業にはないこの学習記録も、自分が学んだことを自分の言葉で授業終わりに書くことで、何が重要か、何をしたのか、また自分がどこまで理解しているかが分かる、授業終わりの自分へのテストの様で、とても自分のことを知ることができました。

B：一年間を振り返って、4月頃の僕は、勉強の内容が理解できず、ついていけませんでしたが、でも、先生が丁寧に教えてくださったおかげで、内容がしっかり理解できて、ノートまとめに、その理解した内容を用いて、しっかりノートにまとめるまでできました。そのおかげで、テストの点数も上がりました。

年度当初、学校生活への不安や学力面での心配などから、国語学習への自信のなさが見受けられたのが学習者A、Bであった。しかし、毎時間丁寧に学習内容や自分の考えを整理し、書き続けることができおり、着実に力を伸ばしていった学習者たちであった。上記の内容からもわかるように、学習者自身が自己の成長や変化にも気づけていることは、彼らの学習に対する取組の成果である。

**(2) 「書くこと」の力の向上が実感できる**

C：学習記録は、最初は何を書いたらいいのか分からなかったし、まとめ方もわからなかったけど、だんだんどんなことを書けばいいのか分かってきて、まとめも最初のころよりは上手くなったと思うので良かったです。

D：自分では学習記録がよく書けるようになったかはわからないけど、自分の考えを書くことに少し強くなったかなと思います。

E：一年間を振り返ってみると、特にノートでは、初めはただ本文やプリントの内容をうつして書いていただけだったけど、先生の授業を通して、内容以外にも、自分の考えを書いたりして、文章を良くできていったと思う。けど、まだ、見直すと、まわりくどい書き方をしていたりするので、もっと短くわかりやすい文章として書ければいいなと思います。

F：一通り見てみて、最初の方は1行とか2行が多かったけど、最後の方は3行まで書いていたり、「～線」が多くなっていった気がして、たくさん書いて良かったなと思いました。2年生になっても続けていきたいなと思いました。

G：この国語ノートを振り返り感じたことは、自分はこの1年で本当に文を書くのが上手になったということです。その理由はまず一つ目に「という」との使用回数を減らしたこと、二つ目に接続詞を積極的に使うこと、そして三つ目は句読点の付け方を学んだことです。この三つを気をつけて上手になりました。

H：いろいろとこの一年でわかることが多くなったなと思った。今は自分らしさが出ている気がするのでいいと思う。初めは自分らしさというものが違うと思っていたけど、今は、思ったことが書けるようになって良かったと思う。

I：こういった学習記録でも、最初から見ていると、詳しく細かく書いているし、前までの自分とは予想をくつがえすようになっているのでびっくりしました。

学習記録を見ていると、おもしろいことを書いていたり、語彙力のなさとか色々あって、とりあえず1年が過ぎるのが早いと思いました。

J：先生は成長したとおっしゃられました。私はというと表現力をふりしぼって毎回書いていたため、同じ単元では学習内容の先回りもしてしまい（そんなつもりはありませんでした。本当に）ネタが尽きて危機を感じていました。

このノートを書く時間といい、自由な表現のできる先生の授業はとても楽しかったです。

学習者C～Fは、「書くこと」を苦手とする者であった。いざ書こうとしても、思いを言語化することに苦手意識があり、問いに対する自分の記述内容が正解なのか不正解なのかにこだわっている様子が見受けられた。しかし、1年間の自分の記述内容の振り返りからは、「書くこと」への認識の変化を見取することができる。少しずつではあるが、1年の終わりには「書くこと」への抵抗感が少なくなってきたように思われる。

また学習者G～Jは、「書くこと」そのものにはあまり抵抗がなく、読んだ作品に対して表現することが好きな者たちであった。表現不十分なところもあり「書くこと」の力としては課題が残る者もいるが、自己の「書くこと」の力の変化を感じ取り、自己の思いを表現することの価値を捉えることができている。

### (3) 「読むこと」の力の変容を実感できる

K：最初の目標の「自分の考えをもって、書いたり話したりできるようにする」では、学習記録を見るかぎり、自分の考えをもって書くことはできるようになったと思います。

L：この一年間を振り返ってみると、最初の時は感想がなかなか上手に書けなかったり、自分の考えがあっても、それを文章にすることができなくてとても大変でした。でも、今

では教科書の内容から登場人物の感情を書いたり、そこから自分の考えも少しだけ書けるようになりました。気にははいなかったけど、ノートを見直してみると、よく分かります。真剣に授業に取り組むことができて良かったです。

M：ノートの最初の方を見返してみると、最近書いた文章とは目に見えて文字数が変わったなあと思いました。僕は国語の、登場人物の心情を読み取ったり、著者の考えや伝えたいことを考えるのが苦手でした。それでも、この毎回のノート提出のおかげで、よりそのことに関して考えられるようになったし、良かったなあと思っています。

国語総合では自分の弱い部分を見つけてそれを強くしていけた、とても楽しい時間でした。

学習者K～Mは、じっくり時間をかけて作品内容や、その世界を受け取る自己について向き合ってきた。授業者の実感として、彼らに対しては、毎回もっと十分に書く時間を設けたかったという思いが残っている。毎時間ノートに向かう姿は真剣そのもので、作品の細部まで読み込んで自己の考えを形成することができていた。上記からは、学習者自身も「読むこと」の質の変化を自覚できていることがわかる。1冊のノートに自分の思いを書きためてきたからこそ、得られたものであると言える。

## 5. おわりに

大村はまは子どもたちに「学習記録」を書かせるねらいについて、以下のように述べている<sup>(注1)</sup>。

書くことの基本的な力を養うことです。書き方、よい文章、そういうものを載せている土台作りといったらよいかと思います。よく言われることばでいえば、筆不精をなくすことです。私の妙な言い方をお許しいただけるなら、心の中を文字にすることです。

学習者の毎時間の記述内容から、「書くことの基本的な力を養うこと」「筆不精をなくすこと」は実現できたと考えている。このことは本実践における成果である。また、本実践では「読むこと」の力を育成することをねらいとし、毎時間「学習記録課題」を提示してきた。実験的な取組ではあったが、学習者の記述内容と照らし合わせてみると、「読むこと」の質を徐々に高めていくという点において、有効であったと考える。また、学習者自身が「書くことを続ける」ことの意義を実感できており、授業者のねらいは達成できた。さらに、文章の上手・下手ではなく、考えて書くことが評価されるというこの活動は、すべての学習者が認められ安心して学べる時間であり、「学び直し」を願って入学してきた前任校の学習者には必要な時間であったと思われる。

しかし、表現することの楽しさや意義を実感させながら、より深い思考力を育む手立てとするためには「学習記録課題」の設定方法について、更なる研究が必要である。本実践では、措定した「読むこと」の力と「学習記録課題」との整合性の検討も不十分であった。また、年度途中で「読むこと」の力の変容を授業者が見取ることと、それに基づく目標の設定・修正も必要であったと思われる。合わせて今後の課題としたい。

## 注

(1) 大村はま (1984) 『大村はま国語教室 第12巻』筑摩書房 p.76

(かねこ もえ・岐阜県立長良高等学校)